

国際交流彙報

交河故城保存修復事業 中国新疆ウイグル自地区所在の都市遺跡・交河故城の保存修復事業は、ユネスコの文化遺産保存日本信託基金により1992年から実施されている。当研究所は、文化庁記念物課などとともに事業開始時からこれに協力しており、1992-93年度には、現況概要調査及びそれに基づく保存修復方針の提言を行うとともに、遺跡内の西北小寺院の写真測量や新疆文物考古研究所員を招聘しての研修などを担当した。

1994年度は、小野が6月19日～7月6日に現地へ赴き、西北小寺院実物大復元模型の建設位置と復元形状、遺跡内の歩行者用園路など具体的な保存修復事業案について、新疆文化庁・ユネスコとの協議をおこなった。その際、併せて基準点測量・水準測量等を新疆文物考古研究所員に指導した。また、11月6日～16日には小澤が現地へ赴き、西北小寺院実物大復元模型の復元形状について詰めの協議を行うとともに、発掘調査で新たに検出した北部地下寺院実測のための基準点測量を実施した。

事業はその後、洪水対策工事・西北小寺院遺構の基底部防護等工事・園路舗装工事・案内板設置工事などが完工し、西北小寺院実物大復元模型の建設も進捗している。なお、事業は当初3年計画であったが、期間を延伸して1995年度も継続することになっている。

(小野健吉)

イギリスにおけるアジア文化財関連資料の収集 1994年7月2日から7月13日まで、英国のブリティッシュミュージアム、ケンブリッジ大学、ヨーク大学、ヨーク考古学トラスト、カーディフ市の南ウェールズ国立博物館、バツアア古代実験農場などを訪問し、アジア関係の考古学文献の所在調査、博物館の展示、普及活動などについて視察し、それぞれの研究者と意見を交換した。

(松井 章)

遺跡探査 文化庁―スミソニアン研究機構との共同研究の一環として、1994年4月18日から9日間、アメリカ考古学会(SAA(Society for American Archaeology))に参加し、アメリカにおいて探査をした成果を研究発表した。また、1994年7月31日から8月10日までコロラド州キャトルガード遺跡において探査を実施した。

また、1994年5月6日から6月20日まで、トルコで開催された国際考古科学会(Archaeometry '94)に参加し、地中レーダー探査の研究成果について発表をおこなった。

(西村 康)

江南庭園調査 日本芸術文化振興基金の助成による「伝統的文化財保存技術の調査研究」の一環として、1994年10月12日から10月26日まで中国を訪問した。参加者は鈴木嘉吉(前奈良国立文化財研究所所長)、牛川喜幸、高瀬要一、加藤允彦の4名である。今回の調査の主たる目的は、揚子江下流域に所在する明清時代の庭園遺跡を視察し、併せて南京の東南大学との交流を深めることであった。訪問したところは上海・蘇州・無錫・南京・揚州・鎮江・杭州・紹興・寧波の9市、視察箇所は60件余に上る。主目的である庭園遺跡では、蘇州の藕園、無錫の寄暢園、南京の瞻園、揚州の寄嘯山莊、杭州の文蘭閣、紹興の蘭亭・沈園、寧波の天一閣などを視察し、中国における庭園遺跡とその修復の実情を知る上で多に参考となった。併せて多くの古建築・伝統的建築様式による再開発地域・河姆渡遺址などの視察もおこなった。短期間にこれだけの庭園遺跡などを視察できたのも、東南大学建築研究所の協力のたまものである。記して感謝の意を表わしておきたい。

また、11月14日から11月27日までの間、基金による本事業の一環として南京市の東南大学建築研究所齋康教授・郭湖生教授・張十慶副教授の3名を招聘し、建築遺構などの合同視察をおこなったほか、「建築と庭園に関する中日比較」についての研究会を開催し、さらに、京都大学人文科学研究所での研究会に合流して意見交換をおこなうなど交流を深めた。

(加藤允彦)

国際考古動物学会 1994年9月26日から30日まで、ドイツの南端、コンスタンツで開催された国際考古動物学会 (International Council for Archaeozoology) に出席し、「日本中世の肉食伝統」についてポスターセッションで発表した。日本の発表は3本であったが、日本の成果がほとんど紹介されておらず、今後も日本の研究を紹介する必要性を痛切に感じた。(松井 章)

国際会議 “The Future of Asia's Past” ニューヨークに本部をおくアジア協会 (Asia Society) とカリフォルニアのゲッティ保存研究所 (Getty Conservation Institute)、およびバンコクを拠点とするサイアム協会 (Siam Society) の共催による国際会議 “The Future of Asia's Past-Preservation of the Architectural Heritage in Asia” が、1995年1月11日から4日間、タイのチェンマイで開催された。「アジアの過去と未来」と題されたこのシンポジウムは、副題のとおり、アジア各地の建築遺産の保存をテーマとするものである。議題の中心となるアジアの国々はもとより、欧米諸国からも多数の専門家があつまり、総勢300人をこえる大会議となった。セッションは、特別なテーマを設定した全体会議 (Plenary Session) と、各国の代表的遺跡の実状を報告する分会 (Site Management Session) に分けられ、ルアンプラバン (ラオス) およびアンコール (カンボジア) とともに奈良が分会のトップをきった。筆者は「奈良」の報告者の一人として、奈良における最新の動向を、指定建造物の修理、町並み保存と景観形成、埋蔵建築遺跡の「復原」事業の3点にわけて概説した。聴衆の反応はきわめて敏感であり、とくに日本の文化財保存のシステムに関心をもたれているような感触があった。英語での質疑応答には難渋したが、4日間の会議と2日間のポスト・ツアーに参加したことで、アジアの建築遺産が直面する諸問題への理解が深まり、予想以上の大きな成果が得られたと思っている。なお、この会議の内容については、『建築史学』24号 (1995年) でも報告している。(浅川滋男)

山西古建築調査 日本芸術文化振興基金助成による「伝統的文化財技術の調査研究」の一環として、1994年7月13日から24日まで中国を訪問した。参加者は岡田英男 (奈良大学)、平井俊行 (京都府教委)、天田起雄、浅川滋男の4名である。今回の訪中の目的は、主として山西省の大同・応県・五台山に残る唐～金時代の仏教建築を視察することであった。まず大同では、雲崗石窟、上・下華嚴寺、善化寺を訪れた。下華嚴寺はすでに簿伽教藏殿 (遼・1038年) の修理を終えていたが、上華嚴寺では大雄宝殿 (金・1140年)、善化寺でも大雄宝殿 (遼) の修理がはじまっていた。大同から渾源县懸空寺 (大規模な清代の懸造り建築) を経由して、仏教の聖地五台山にはいった。五台山では初めに明・清代仏寺をいくつか見学し、翌日唐代建築として名高い南禪寺大殿 (782年) と仏光寺大殿 (857年) を訪れた。仏光寺には金代再建の文殊殿 (1137年) もあり、多数の柱を省略した特殊な平面と構造に驚かされた。

その後、五台山から一度大同にもどり、日帰りて応県の仏宮寺釈迦塔 (遼・1056年) と浄土寺大殿 (金・1184年) を視察した。仏宮寺釈迦塔 (いわゆる応県木塔) は、中国に残る唯一の木塔であると同時に、世界で最も高大な木造建築物でもあり、見る者を圧倒する。岡田英男先生の言葉を拝借するならば、まさしく「法隆寺に勝るとも劣らない世界有数の木造建築」といって過言ではない。ところが、この巨大な木造の塔にも切迫した問題が生じている。三重以上の歪みやねじれ、あるいは台輪・肘木などの部材の破損が甚だしく、根本的な大修理が必要な時期になっているのである。すでに中国文物研究所は、修理のための基礎調査を終えているが、莫大な費用を要することもあり、修理そのものが具体化する動きはみられない。応県木塔の修理を実現するためには、日本をはじめとする先進諸国の国際協力が必要なことを改めて痛感させられた。なお、今回の山西古建築調査には、中国文物研究所の張之平女史が同行され、さまざまな便宜をはかっていただいた。この場をかりて深く感謝したい。また調査の成果としては、平井俊行氏の報告「中国山西省の古代建築の技法の調査に参加して」(『文建協通信』17号：p.3-16、1995年2月) がある。(浅川滋男)

ロシア・バジリク古墳群出土遺物の保存科学共同研究 ロシア科学アカデミー・シベリア支部歴史学、考古学、民族学研究所（ノボシビルスク所在）と当研究所の間でバジリク古墳群出土遺物に関する保存科学共同研究をおこなった。バジリク古墳群に関しては継続的な発掘調査が進められており、スキタイ文化を知るうえでは重要な発見が相次いでおり、これらの出土遺物の科学的保存処理が計画されて、日本ーロシア間での保存科学共同研究が進められている。

今回は、昨年度に引き続き出土有機質遺物の保存科学研究と凍結古墳から出土した水浸出土木材（大型のくり貫き1本作りの木棺）の保存処理を現地でおこなった。この木棺は硬くて緻密な針葉樹（カラマツ材と推定）が利用されており、凍結状態もしくは低温状態で埋蔵していたこともあり、ほとんど腐朽しておらず含水率も150～200%前後と低く極めて保存状態は良好であった。しかし、材は年輪にそって層状の剥離が引き起こっており木棺全体では20～30破片に分離・分割していた。処理方法については、現地でPEG処理法（PEG濃度の設定）や凍結乾燥（予備凍結および乾燥時間の設定など）について実物試料による予備実験をおこない、検討をかさねた。その結果、①このように保存状態の極めて良好な遺物でも自然乾燥では遺物は、若干の収縮・変形をおこす。②低濃度のPEGを含浸するだけで収縮・変形を防止できる。などを明らかにすることができた。実際の保存処理は、まず細菌類の繁殖を防止するためホウ酸・ホウ砂の混合溶液で処理した後、高分子PEG（PEG-4000）の低濃度溶液（最大で40%PEG水溶液）を含浸した。含浸終了後、遺物を取り上げ部材ごとに布にくるんで、現段階では徐々に自然乾燥を実施している。また、一部の部材については真空凍結乾燥を実施中である。今後、これらの部材がすべて乾燥した段階で、強度を要する部材については補強用材を用いて接合し、一部の欠損部分は合成高分子材料による充填を行い修復・復元を完成する予定である。また、繊維製品に関しては、布の劣化と染料の退色を防止するため、脱酸素・調湿剤をいれた密閉環境内での保管方法の実験を開始した。このような科学的な保存処理や保管が実施されるのは、バジリク古墳群の遺物でははじめての試みと思われ、今後このような科学的処理が進められ、さらに保存科学研究が両国間で進展してゆくことが期待される。

（沢田正昭、肥塚隆保）